
Innocent Candy

神崎 ゆう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Innocent Candy

【Nコード】

N7499E

【作者名】

神崎 ゆう

【あらすじ】

『Innocent』シリーズ第五弾、『睦月修太』編！手術嫌いの神嫌い、睦月修太は総合病院の二大医師。接近する小さな命の終焉。睦月の出す結論は……？

世の中に神なんていない。人を都合よく助けてくれる存在なんてありはしない。もしそんなのがいるのなら、今みたいに面倒な状況から俺を救ってくれるはずだ。そうだろう？

「いい加減にしてください！！」

都心の総合病院に怒号が響き渡った。出所である部屋では、看護師が鬼の形相で医師を睨んでいる。

廊下を歩いている患者や医師に驚きの表情は見受けられない。またか……と皆呆れつつ、部屋の前を通り過ぎるのだ。

「急患なんです。早く手術室へ来てください！！」

「……面倒臭い」

医者 of セリフじゃねえ！！今すぐ殴ってやりたい衝動に駆られるが、何とか堪える。

今はこのクソ医者を手術に引っ張るのが最優先なのだ。こんな奴がここの二大医師の一人だとは……泣けてくるわ。もう一人とは大違い。

「いいから早くしてください！時間がないんです！」

このままでは本当に患者が死んでしまう。しかし、医師は依然としてやる気のない顔で応対を続ける。

「あんまり叫ばないの。アメなめる？」

いるかポケエツ！！医師の差し出した手を容赦なくはたき落とす。患者が生死の境を彷徨っている時にアメ？ふざけるな。オレンジ色の飴玉が、僅かに音を立てて床に転がった。

医師の名は睦月修太。この病院では二大医師と称される者の一人だ。

しかし、数年前の手術ミス以降手術を拒み続けており、彼への対処に病院側も手をやいていた。

「……そんなに手術手術って言われてもさ、今回の患者は俺の管轄

じゃないんだし、頼ること自体間違ってる？」

今回の患者に必要なのは外科手術。内科医である睦月の仕事ではない。

しかし、彼ならそれができる。やる気を出せば……だが。

「オレ以外にもやれる奴はいるだろ？もう一人の二大医師がさ」

「如月先生は忙しいんです！」

ただでさえ大きかった弥生の声がさらにボリュームを上げた。多分、工事現場の人はこれよりも大きい音をいつも聞いているんだろ。うな。尊敬するよ。

何と言ったら諦めてもらえるだろうか。手術をする気なんてサラサラない。そんな奴を強引に連れて行ったところで失敗するのがオチだと、どうすれば気付いてくれるだろうか。

思案を巡らせる睦月だが、イマイチ良いアイデアが浮かばない。

いるんだったらこの状況を何とかしろよ、神とやら。

「……弥生ちゃん」

神に対して悪態をついた瞬間、助け船が現れた。

メガネをかけたショートカットの女医……もう一人の二大医師だ。

「如月先生！手術の方は……」

……成功。如月綾は呟いた。無口で無愛想なイメージを与えがちだが、本人は他人に冷たくしているつもりはない。

会話もするし、稀にだが笑いもする。仕事熱心だし才能もある。

まあ、変な奴である事は間違いないけどな。

「……手術は私がやる」

待ってました！さすがは二大医師、そうこなくちゃな……オレもか。

「そうかそうか！それじゃ、頼んだぜ」

「……あの子の事だけど」

この場から逃げようと如月とすれ違った瞬間、彼女の小さな声が耳に届いた。

表情を一変させ、睦月は足を止める。

「もう時間がない。早めに決断して」

どうするのかを……。言い終えた如月は手術のため、睦月とは逆の方向へ歩き出した。

言うべきことは伝えた。後は……。彼次第。

一方、彼女について来た弥生は、睦月の背を睨んでブツブツ言っている。

「まったくあのバカ、ホントに医者？先生も何とか言っていてくださいよお」

弥生の要望を受け、如月は言葉を探す。

……………あ。

「髪……切った？」

「ああ、わかります？実はそうなんですよ」

……………って違あああうっ！弥生のツツコミが病院全体に響き渡った。

病院には当然、身体や心に不具合を抱えている者が入院している。そしてこれまた当然、病状にはそれぞれ重さがある。重い者と軽い者は病棟が分けられ、それぞれの場で治療を受けるのだ。

重い方……つまり助かる可能性が低い患者の集まる第弐病棟を歩きながら、オレは憂鬱だった。決断を迫られていたから。

都合の悪い事は重なるもの。こんな時に限って、いつもより早く目的の病室についてしまうんだ。二、三回ノックして、横開きの扉を開く。

「あ、先生！こんにちわ」

幼い女の子……その子の弾けるような笑顔がオレを出迎えた。

子供ってというのはどうしてこう、キラキラした表情ができるんだろうな。現実ってもんを知らないから？間違いないじゃないだろう。けど他にもある……そんな気がする。

女の子、水城皐月みずしろ さつきの個室は実に質素だった。白いベッドとカーテンと、床と壁と天井、そして壁があるだけだ。子供にはあまりに退

屈な環境だろう。

「……？」

ふと、白衣のポケットに違和感を感じた。見下ろしてみると、皐月ちゃんがポケットに小さな手を入れて何かを探している。

探し物を見つけて出てきた彼女の手には、オレンジ色の飴玉が二個握られていた。

「えへへ、さつきこれ好きなの」

彼女の笑顔に、思わずオレも笑った。

知ってるさ。だからいつも持ってるんだ。退屈しのぎにはなるだろう？

二個の内一つを自分のポケットにしまつて、もう一個を口に入れる。幸せそうな表情が、おいしいと語っていた。

この笑顔、アメをつくった奴らに見せてやりたい。泣いて喜ぶな、きつと。

「さつきね、神様をお願いしたの」

「！……何を？」

他愛のない皐月の言葉。その一言で睦月の声のトーンが変わった事に、皐月は気付かなかった。

変わらぬ純粹な笑顔で、皐月は話を続ける。「外で遊べますように。そのために、病気が治りますようにって」

皐月ちゃんは肺を患っている。それも、第弐病棟で生活しなければならぬほど重いものだ。その願いが叶うか叶わないか、どちらの方が可能性が高いのか……言いたくない。この笑顔を奪うようなマネはしたくない。

いや……違うな。結局オレは、自分が手術をしたくないってだけの理由で、この子の命を預かる事を拒絶しているんだ。情けない……如月は見事、この黒いものを振り払って仕事をしているのにな……。

「……ちよつと出てくるよ。すぐ戻るから」

「うん！」

他人を疑おうとしない綺麗な目が、オレの心に突き刺さった。

ガアアンッ！

クソ……。見るに堪えねえな、オレ。嫌なことから逃げて、挙げ句壁に八つ当たりかよ。

——……。痛えな、畜生……。

「家族がいない？」

病院内にあるレストラン。如月と弥生はそこで手術後の一時を過ごしていた。

手術は成功。患者は一命を取り留めた。

ここへ来てすぐ話題になったのは、睦月君のこと。弥生ちゃんはどうも、彼の行動に納得がいかないらしい。

そこで、彼が手術をしなくなった理由……。それを私の知っている範囲で話してみる事にした。

「……少し前に一般車とトラックの衝突事故があったの、知ってる？」

「はい。確か、一般車の方はグチャグチャで、乗っていた人達は……」

トラックの運転手は軽傷で済んだのだが、一般車の家族四人は意識不明の重体。すぐここに運び込まれたが、まもなく死亡した。

事故を起こした運転手は病院から逃走し、今も捕まっていないらしい。

「……その一般車に、睦月君の家族が乗っていたの」

あ……。そういう流れか。聞いたのは失敗だったかな。心の中で、弥生は後悔した。

「睦月君が手術したんだけど、結局助からなくて……。ね」

絶望した睦月修太はそれ以後、手術をしなくなった……。ってところね、きっと。

まともにメスすら握れなかっただろう。家族の身体を切るなんて、

簡単にできる事じゃない。かと言って、他人に任せる事もできなくて……。

この二人、似てるな……。自然と、そう感じた。

如月先生も昔、手術の失敗で恋人を亡くしている。手術の時、如月先生は学会に出席していて病院にはいなかった。

今思うと、如月先生が大声をあげたのはその一度だけだ。病院に戻ってきてすぐに、私がやるって何度も……。でももう手術は始まっていて、先生は何も出来ずに立ち尽くしていた。

後から聞いた話だけど、先生はその後しばらく、恋人の墓の前から動かなかつたらしい。信じられなかつたんだろう。彼の死が。

恋人の名前は確か……赤口一樹、だったかな。

経緯は違うけど、失ったものは同じ。悲しい類似だ。

でも先生は見事立ち直り、休む暇がないくらい仕事をしている。

それが睦月との決定的な差。

……………あれ？

「……そう言えば如月先生って、睦月先生とよく一緒にいますよね。仲いいんですか？」

冷静に考えれば、如月先生は暇な時——滅多にないけど——、いつも私か睦月と一緒にいる。私は自分から向かって行ってるんだけど、睦月の場合はどうなんだろう。睦月が寄ってくるのか、先生が寄って行ってるのか。

先生は何やら考え込んでいる。最近の自分の行動を思い出しているようだ。

「……そうなの？」

「私に聞かないでくださいよ！」

ダメだこの人、全く自覚してない。私はともかく、睦月と一緒にいる事に何の違和感も感じてないんだ。恐るべき……天然。

「おお、いたいた。よお、先生。元気にしてるか？」

やりようのない空気が、意外な形で消え去った。三十代後半くらいだと思われるオッサンが、如月先生に声をかけたのだ。オッサ

ンの顔を見て、先生の表情が若干明るくなる。私にしかわからない範囲で……だけど。

「あ……浮気」

「上樹だ！変な発音で呼ぶな。勘違いされる」

何だビックリした。今の発音、完全にわざとだ。如月先生って、無表情のまま冗談を言うから、普段一緒にいる私も驚く事がある。

もう少し感情の起伏が顔に出る人だったらな……。まあ、先生らしいと行ってしまえばそれまでなんだけど。

「……ジャーナリストが何の用？」

この人、記者なんだ。だったら、用件も想像がつく。

「何ってお前、取材しに来たんだよ。国立総合病院の二大医師、如月綾さんにな」

やっぱり……。ここ最近の先生の活躍は半端じゃない。何せ元々多かった仕事に加えて、本来睦月がやるはずの手術までこなしているのだ。本人にその気がなくても目立ってしまう。

先生はさっきよりも表情が曇っている。やっぱり、私にしかわからない範囲で。

「最近ライバルを押しつけて独走中じゃないか。いよいよ本気か？」
ライバルとは当然睦月の事。仕事をしないせいか、彼は影が段々薄くなってきている。少し前まで同格扱いだったのに……周りからの評価って低いなあ。

私の心の中に、小さくて黒いものが引つ掛かった。迷惑な人だと思っていたけれど、こうなってくると、何だか可哀相だった。

「……別に」

先生も私と同じ事を思ったのかな……それとも全く別の事かな。いずれにせよ、不機嫌な先生の言葉は、会話に用いるにはあまりにも無愛想で、わかりやす過ぎるものだった。

ジリリリリリ……ジリリリリリ――。

「あ……」

突然鳴り響いた音の正体は、先生のケータイだった。このレスト

ランは病棟からは隔離されていて、ケータイを使っても問題にはならない。

でも、私が――多分、上樹さんも――気になったのはもっと別の事だった。

着信音に使われていたのは黒電話、しかも電話じゃなくて、メール用に。

先生……いくら何でもそれは変です！ほら、上樹さんも変な目で見てますよ！？

私の心情に気付いているのかいないのか、先生はケータイの画面から目を離さない。

――……！

突如、先生の表情が一変した。今度は私以外にもわかる。メール……一体誰からなんだろう？

メールなんて全くと言っていいくらい使わない。今届いたメールも、受信番号が一桁だ。何と言うか、面倒臭くて……あれ、睦月君みたいだった気がする。

他の医師も看護師も、ここに来てはケータイをいじっているけど、この小さな機械で一体何をしているのだろうか。最近のケータイはネット接続もスムーズらしいから、それかな……パソコンでやればいいのに。

睦月君があんまり勧めるから買ったけど、あまり慣れていないものだから、さっきのメール着信の時も危うく本体を耳まで持っていたきそうだった。さすがにそれは恥ずかしい。

セキュリティ番号を入力して、どうにかメールの画面を開く。

あ、違う違う。新規作成じゃなくて……。

――……！

「……上樹」

「ん？どした」

内容は短かった。それでいて重要だった。絵文字も顔文字も記号もない、彼にしては珍しいものだった。

「……手術があるから」

私のケータイに登録されているメールアドレスは弥生ちゃんと彼のだけ。赤口君のは……ちよつと前に消した。過去に縛られるのを恐れたから。

今は振り返っている時じゃない。過去の回想なんて墓参りの時やれば十分だ。

……そうだよね、一樹君。

「どうしたんだ、あいつ？」

「さあ……」

いきなり血相変えてどっか行きやがって。取材の途中何だがなあ、こっちは。

「やれやれ、相変わらず扱いにくい奴だ」

まあ、凡人の常識に当てはまらないからこそ、天才となり得るんだがな。

差出人…睦月修太

件名…無題

本文…始める。

ムツキ先生、まだ帰ってこないのかな。お話聞いてほしいのに。入院生活ってはじめはとってもおもしろかったけど、長く続くとタイクツなんだ。外の子みたいに元気に走り回りたいな。

「どうしたんだ？ 珍しく大人しいな」

「先生……！ おかえりなさい」

先生の大きな手が頭をなでる。お父さんみたいで何だか落ち着く。

ムツキ先生は私が入院した時からずっと面倒をみてくれてる。でも他のことはほったらかしで、かんごしさんに怒られてるんだって。どうしてそんなによくしてくれるのって聞いたら、さつきのお母さんは先生の『ハツコイ』の人なんだって。偶然ってすごいよね。

「あのな……皐月ちゃん。先生、ちよつと急がないといけないんだ」
どうしたんだろ。先生、何だか苦しそうな顔してる。変なの食べたのかな？

「これから皐月ちゃんの悪いところを取る手術をする。いきなりで悪いけど、いけるか？」

そっか……手術するんだ。切られちゃうのは怖いけど、それで見んなと同じように、外で遊べるようになるんだよね。

「……うん」

「よし。じゃあ先生、準備するから」

優しく肩を叩いて、先生は出ていった。もう一度お祈りしようかなって思ったけど、やめとく。

だって、さつきを助けてくれるのは神様じゃなくて、ムツキ先生だから……。

そりゃ迷ったさ。手術なんてしまくない。でも……いつまでも今のままじゃいられないだろ？

手術しなきゃあの子は死ぬ。それを黙って見ていられるわけがない。あの子は……特別なんだ。

初恋がどうか、そんなことを言っているんじゃない。あの子はオレに

「今のままじゃダメだ」って認識させてくれたんだ。せめて、その恩を返したい。

怖いさ。どうしても、あの時のことを思い出す。

でも思ってたんだ。オレが助けなきゃ、あの子の親はオレと同じ思いをすることになる。そんなの、オレには耐えられない。

何だよ……結局自分の事じゃないか。ダメダメだなオレ。

いいさ、それでも。別に感謝されたいワケじゃないし……。オレの自己満足であの子が助かるかもしれないなら、やるだけの価値はあるはずだ。

とは言え、一人じゃさすがに不安だから、如月の手を借りるけど。
――……。

そう言えば、如月ってどうなんだろう。

一応オレたちライバル扱いなんだから、もう少しいざこざがあってもおかしくないはずだ。何も言わずに皐月ちゃんの病状診てくれたり、オレのやるべき手術を代わりにやってくれたり……。

よく考えれば、オレって如月にすげえ世話になってるな。一生分くらい。

気付くのが遅過ぎた。オレは色んな人に、数え切れないくらい助けてもらってるんだ。

今からじゃもう手遅れかもしれないが、出来る限り溜まった恩を返していくとしよう。そのためにはまず……。

悪いな、皆。オレ、あんたたちを吹っ切るよ。

もう一度、人の役に立ってみようと思うんだ。もう一度、この手で誰かを助けていこうって……そう思ったんだ。

一段落したら、墓参りにいくよ。だからどうか安らかに……な。

皐月ちゃんの親と話した。あの人と話すのは久しぶりだ。

変わってなかったなあ……って、言うほど覚えちゃいなかったけどさ。

「覚悟……できたの？」

如月……頼もしい奴だ。オレのせいでめっちゃ疲れているはずなのに、あの短いメールで全てを理解し、駆けつけてくれた。

意外だった。てっきり

「……そう」って返してくるだけだと思ってたのにな。

「ああ……できたさ」

「そう……」

手術室に皐月ちゃんが運び込まれてくる。これから手術だったのに、笑ってる。

オレはこの笑顔に感謝しなくちゃいけない。この笑顔があったから、オレは決意する事が出来たんだ。

再び、手術をするという決意を。

「怖くないか？」

「うん。さつき、先生を信じてる」

神様じゃなくて、オレたちを……。心に響く、最高の言葉だ。

「……如月」

応えなくちゃな。その信頼に……！

「これが終わったら、メシでもおごらせてくれ」

「……期待しないで待ってる」

皐月ちゃんは全身麻酔等の影響で一時的に眠った。さあ、オレたちの仕事だ。

ありがとう、如月。お前となら、やっていける気がする。仕事のライバルとしても……そして……。

ここから先は手術の後にしよう。今は皐月ちゃんの手術が最優先だ。

見てやがれ神……てめえに頼らなくても、オレたちはこの子を助けてみせる……！

「オペを始めます」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7499e/>

Innocent Candy

2010年10月8日15時43分発行